

ESD レポート

Education for Sustainable Development

2004 冬
vol.2

ESD とは「持続可能な開発のための教育 = Education for Sustainable Development」の略。社会、環境、経済、文化の視点から、人類が直面する様々な課題に取り組み、公正で豊かな未来をつくる「持続可能な開発」—— それを実現する力を、世界各地に生きる私たち一人ひとりが学び育むことを目指して、「国連持続可能な開発のための教育の10年 (ESD の10年)」が、2005年からスタートします。

ESD のはじめの一步は、参加すること、つなぐこと。

でも、それって誰が、なにを、どうやって？ 過疎化のすすむ農村の集落に、不登校の子どもたちが集う都会のフリースペースに、そんな疑問を解きほぐすカギがあります。



みたか

不登校の子どもたちが、母親や地域との協同で始めたパン屋さん。小麦の生産から加工・流通までかかわるという、手づくりのコミュニティー・ベーカリーだ。子どもの自立支援を、人々の暮らしに役立つ参加型事業でつくりあげる。そんな試みは、どのように動き出したのか？ (2頁)

◀ 三鷹の森ジブリ美術館の向側にある小さなパン屋さん。素材を大事にした健康的な季節感あるパンばかり。

目次

特集 地域発 ESD 2

- みたか…………… 2
- やなぎだに…………… 3

ESD とつながろう

- ESD を読む会報告 …… 4
- ESD-J に期待します！ …… 4
- 私が ESD-J に入ったわけ …… 4

ESD を知ろう

- ESD 基本用語集 …… 5
- ESD 関連の本 …… 5
- 地域の動き…………… 6
- 国際的な動き…………… 6
- DESJ 日本実施計画最前線 …… 7
- ESD-J だより…………… 8

特集 — 地域発 ESD その2



やなぎだに

高齢化がすすむ農村で、高校生が立ち上がった。お年寄りを指導者に、カライモ生産で稼いだお金は集落の福祉事業に使われる。それを起爆剤に、集落の人と地域資源がつながって、循環型・持続型の新規事業が次々と。生涯現役の安心して暮らせる地域づくりの姿とは？ (3頁)

◀ 「柳谷高校生クラブ」を中心に集落民総出で行なうカライモの苗植え。遊休地一ヘクタールで八〇万円の収益に。

2004年12月1日発行

「持続可能な開発のための教育の10年」
推進会議



父母や地域も参加 もう一つの学びの場づくり

東京都三鷹市 NPO 法人 文化学習協同ネットワーク

1999年に認可された「子どもと若者の居場所づくりと自立サポート」を使命とするNPO団体だ。活動の幅は広く、教育相談、文化講座、ホームヘルパー2,3級講座、仕事体験ワークショップ……。2003年からは「土曜子どもセミナー」も開催し、地域の子育てサークルのお母さんや学生も積極的に参加して「冒険遊びの場、ガリレオ教室、絵本読み聞かせ」をしている。いわば、「学校の外に設けられたもう一つの学びの場」なのだが、始まりは受験目的の補習塾だったというから驚きだ。

◆わが子の教育から子どもたちの教育へ

振り返るといくつもの段階を経てきたことがわかる。1974年に父母の要請と支援で大学院生が学習塾を開いた。まず、「わかるまで教えます」がスローガンだった。1980年代になると「どうして勉強しなければならないのか？」という子どもたちからの本質的な質問に向き合うことが多くなり、これまでの勉強内容では意欲を失う者が増えた。そこで「知る喜びと学ぶ意欲を」をスローガンに教科指導以外の取組みを始めた。夏休み中に行われる1週間ほどのサマーセミナーも、スポーツや教科学習から地球レベルや身近な問題を取り上げた探求的な学びになった。

しかし、休みに生き生きしていた子どもたちが2学期開始とともに元気を失うのを見るにつけ、年間を通じてさまざまな取組みが必要だと考えるようになる。自然体験、討論会、受験生を励ます会など。これに対し、塾本来の勉強内

容がどうなっているのかと、父母から不安・不満がでた。それで、父母とスタッフが協同して内容や運営を決めていくことになる。「わが子の教育から子どもたちの教育へ」という視点だ。

◆“居場所”を求める子たちと競争社会の狭間で

1990年代になると入学後も自分たちの“居場所”を求めて通い続ける子が増えた。また、不登校生の入会も増えた。そこで不登校生たちの癒しの“居場所”であり、自立を応援する学びの空間として、フリースペースコスモを始めた。塾同様、父母の協同運営である。この活動を通じて、親たちの多くは子育てや教育のあり方を捉え直し、その子らしい生き方を見つけ、元気を取り戻していきけるよう、望むようになった。

また、こうした“居場所”での活動をとおして子どもたちは、少しずつ元気を取り戻していきけるのだが、実際に社会に出ていこうとしたさい、不登校の経歴が障害となったり、競争的な職場や人間関係によるストレスに挫折し、引きこもり状態に陥ってしまう若者が少なくなかった。彼らの“居場所”と社会をつなぐ、「社会参加へのステップとなるような場」を、父母、スタッフ、ボランティア学生のほかに地域の人々の参加・協同からできないものか、と模索した。

◆無農薬野菜・小麦づくりから始めるパン屋

その一つの結果が、「風のすみか」というパン屋（青年たちが安心して働くことのできる職場）を立

ち上げることであった。「風のすみか」設立の協力を地域に呼びかけたところ、30～40人のNPO関係者や地域住民が賛同し、立ち上げまでの期間、資金集めから店舗づくり、販路の拡大などに、スタッフたちと一緒に参加をした。おかげで、保育園・学校のPTA関係者や三鷹地域で活発的な活動を行っていた“地域通貨”のグループとのつながりができ、今年2004年にオープンとなった。

つぎは、パンの原材料となる作物の生産、農家からの農作物の買取り、加工、販売の一連の行程に生じてくる“仕事”を、若者たちが担っていくことが目標となっている。その一環として現在、神奈川県津久井郡にある「東京農工大学FM津久井」という場所を拠点に、地元農家の方（宮城茂氏）の協力を得て、定期的に青年たちが原材料の生産にかかわり、収穫された無農薬野菜・小麦を「風のすみか」へ搬入するという活動が取り組まれ始めている。

今後とも、地域の中で学校外の教育と社会参加の場としての活躍が期待される。

（レポート：相星素子）



売り場のすぐ隣で、お客さんからもパンづくりの工程がよくわかる。お母さんたちも参加して一生懸命に作業中。

NPO 法人 文化学習協同ネットワーク
代表：佐藤 洋作

（さとう ようさく）
1947年生まれ。NPO文化学習協同ネットワーク代表理事。東京都下の多摩地域を中心に、学校外で子どもと若者の居場所づくりに30年近くかかわる。学習教室、教育相談室、および不登校の子どものためのフリースクールを主宰。現在は法政大学や社会教育講座などの講師も兼任。主要な著作『君は君のままでいい』（ふきのとう書房）、『中学生をわかりたい』（共著、大月書店）、『NPOと参画型社会の学び』（共著、エイデル研究所）など



〈つながり〉の回復と自主財源の確立で 持続可能な集落づくり

特集 地域発ESD
やなぎだに

やなぎだに
鹿児島県串良町・柳谷自治公民館長 豊重哲郎

■高校生は地域社会活性化の 機関車役

世帯数128戸、人口287人、高齢化率34%のここ柳谷集落で、遊休地を生かしたカライモ（サツマイモ）生産を始めたのは1998年のことだった。30aの農地のほか、集落の農家から余った苗を提供してもらう。畑の作業を担うのは、この年結成された12人の「柳谷高校生クラブ」員たちだ。堆肥や肥料をまく作業のぎこちなさも初々しく、通りすがりの大人たちのアシストも得ながら栽培し、35万円の収益を得た。このお金で東京に1泊しイチロー選手の野球観戦しようというのが、彼らの夢だった（実際は福岡ドームとなったが）。

高校生は地域社会活性化の機関車役だ。若者が他出し高齢化がすすむなか、彼らの姿は小中学生のよき模範となり、集落民全体を元気づける。一方彼ら自身もその力を周囲の大人に認められるなかで、人間的に成長する。

いまやカライモ栽培は集落民総出で行われるようになり、1ha80万円の収益は、一人暮らしの高齢者宅に緊急警報装置や煙感知器を設置したり、集落全戸に防犯ベルを設置するなど、集落民のために使われている。

■人とモノがつながり、自主財源が次々と

高校生とカライモが生み出した好循環は、集落の人や地域資源をどんどんつないで、循環型・持続可能な生活をつくっていく。その一つが、収益でつくった土着菌センター。地元の山から採取した土着の微生物を米ヌカなどで培養

し、土着菌をつくる。これをカライモや野菜の栽培に利用するほか、畜産農家が牛や豚のエサに混ぜる。すると、糞尿の悪臭が劇的に減り、子牛や子豚の下痢がなくなるなどの効果が現われた。さらに、その糞尿を発酵させた土着菌堆肥を使うと、作物のできがよくなる。全戸に設置した生ゴミ処理用コンポストにもボカシが投入される……。同センターでは年間3万kgの土着菌を製造し、年間の売上は約200万円。これまた集落の大きな自主財源になっている。

なお土着菌センターも、集落民総出の手づくりで建設した。木材は集落民が山の木を提供。業者に頼めば300万円以上かかるものが、電気敷設費の8万円でできてしまった。一人ひとりが自分のできることを考え、それぞれの方法で協力。地域づくりへの参加が人びとをつなぎ、人びとを成長させる。

今年3月には土着菌育ちの高品質カライモを原料に焼酎「やねだん」（柳谷の意）が誕生した。まろやかな味が女性にも受け、集落の新たな収益になるだろう。また、年間2000人にのぼる視察者向けに、手打ちそば処「やねだん」も開店。集落に埋もれていた人や資源がつながりあい、ここにしかない価値を生み出す「宝」となった。

■地域の子は地域で責任をもって育てたい

2000年、公民館で設置した「集落民会議」で「おはよう声かけ週間」を設定した。中学校で問題が起きたさいに徹底して真剣に生徒の声を聞くと、「勉強をしたいけどわからない」「集落の人は、遅刻していく生徒



土着菌センターには、集落で昔使っていた日用品を集めた「お宝歴史館」が併設される。

を見ても声をかけてくれない」との言葉がでたからだ。子どもは地域の人びとの輪のなかで育つもの。これを機に、集落の子の顔と名前を覚えるよう、毎朝住民が沿道に立ち、登校する子に声をかける運動を展開した。また、「勉強がわからない」との声に、基礎学力のチェックを行ったら、分数のできない中学生が3人いた。鹿屋市に住む元教員に懇願し、カライモの収益金から補助金をだし、週3時間の寺子屋を開始。分数を5週でクリアした生徒たちの満足気な顔は、この取組みの励みである。

子どもたちには未完成の魅力がある。だから地域の子は地域で責任をもって育てたい。自主財源を充実させて内部留保が500万円になったら「集落奨学金」も設けたい。遠く離れた都市部に他出する子どもたちとも連携をとる方策の一環である。その夢もいま、手の届くところに近づきつつある。

柳谷では、このような取組みをとおして、弱い存在である高齢者や子どもも含めて、お互いの存在を確認しあい、全世代の集落民が総参加して、生涯現役で生き生きと、安心して暮らせるむらづくりを、自前の力で押しすすめている。

豊重 哲郎

（とよしげ てつろう）

鹿児島県刊属郡串良町生まれ。串良商業高を卒業後、東京で銀行マンに。昭和46年にUターンし健康食品販売などを手がける。1996年、従来は65歳前後の方の輪番制（1年任期）だった柳谷集落の自治公民館長に、55歳で選出される。以来、行政の補助金に頼らない全住民参加型の地域づくりをすすめて、平成14年、第8回日本計画行政学会「計画賞」の最優秀賞を受賞、2004年には、政府の選定する農村モデル地域に選ばれる（全国30カ所）。



「ESD レポートを読む会」が開かれました

9月の本紙創刊を機に、東京、富山、石川、鹿児島各地で、「ESDレポートを読む会」が開かれ、本紙の記事を肴に、それぞれの思いや疑問、雑感が語り合われました。新宿会場での話題のなかから、前号の特集についての意見・感想をのぞいてみると……。

——サステナブルという、「環境を持続させる」というイメージだが、正直その視点がよく見え、たんなる地域活動のように思えた。

——いや、持続可能性という視点は、よく表現されていると思う。たとえば、えひめグローバルネットワークでは、モザンビークの内戦という破壊的行為や日本での大量生産・大量消費という持続不可能な状況に対して、それをうまく結びつけながら、人と人のつながりを修復してい

る。千葉の秋津小学校区では地域が親にとつて「寝に帰る場所」であったり、子どもの不登校という、ライフスタイルの持続不可能性を、学校に地域を持ち込んで暮らしの場に再生した。そういう、人と人との関係修復が表現されていた。でも、人と自然との関係修復については少し物足りなかった。

——4頁で阿部治先生が、三つの公正について言っている。世代内公正、世代間公正、種間公正。言い換えると、人と人との関係、現在と未来の関係、人と自然の関係。この3つはESDの活動を点検する視点になるかも。

——表紙の秋津小の写真はただの運動会写真では？

——地域との合同運動会だから、ここに写



大人は教師でも父兄でもなく、ご近所さんたちではないか？ だとしたら、やはりスゴイ写真。……同じような疑問をもった方はいますか？ ESDとはなんとも広い概念。定まった答えもありません。だからこそ、わが地域のESD、わが家のESDを考え、つなげ、チョットやってみる。「読む会」が、そのきっかけをつくる場となればよいですね。（レポート：伊藤伸介）

ESD に期待します！

開発教育協会 田中 治彦

ESDが始まってから、環境教育の関係者と緊密に交流するようになり、うれしく思っています。1992年の地球サミット以降、「環境教育と開発教育とは手を携えねばならない」と言われてはいたのですが、具体的な行動は乏しかったのです。ESDを迎えて、いよいよお互いに議論し交流し協力し合えるようになりました。

開発教育という名称も「開発」を冠しているため、これまで通りがよくありませんでした。今では、あなたが意味する「開発」とは何ですか？と聞かれたときに、「はい、持続可能な開発です」と答えるとなんとなく受入れられるようになりました。とはいうものの、環境関係の方々は今でも開発という言葉に抵抗を感じられる方も多いのではないのでしょうか。しかしESDを推進するためには「開発とは何か？」は避けて通れません。従来の経済開発に対置する形でさまざまなオルタナティブな開発が論じられました。「内発的発展」「社会開発・人間開発」、そして極めつけは「持続可能な開発」——それらの「開発」について環境教育の方々はどのようなスタンスをとるのでしょうか。これからの議論が大いに楽しみです。



田中 治彦（たなか はるひこ）

郵便友の会、YMCA、南北ネットワーク岡山などを経て（特活）開発教育協会に。現在代表理事。立教大学では社会教育と国際教育を教える。今後、ワークショップをととしたタイや韓国とのESD交流に意欲的。

私がESD-Jに入ったわけ

保護者にぜひ知ってほしい

相星 素子

長女が年長のときから、集団生活や友達づきあいが苦手なため、小学生時代中、私が学校に行く必要が多くなりました。そのころのおかげで、子育てのあり方、先生と保護者の対話、保護者同士のおつきあい、学校での勉強などについて、いろいろ考えざるを得なくなりました。長男は友達を始終家に呼ぶので、友達とのかかわりあいを目の当たりにします。自分の子をとおして足元をみつめながら、社会での青少年の事件、親子の事件、不登校生、引きこもりなどの現象が増えている原因がなんなのかしら、と考えます。

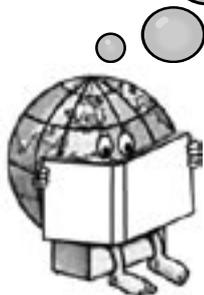
ESD-Jの立ち上げを知ったとき、世界的にもこんな流れがあるんだあ、とうれしくなりました。さまざまな問題は、「つながり」と「活気」が根っこで欠けていることから起きるように思え、そこを大事にする教育がなによりも大切だと思っていました。ESD-Jの目指す方向は、このことを大事にするものだと思います。そして、このような動きをなによりも、子どもたちの教育に毎日向き合っている保護者が知って理解したら、大きな力になるなあと思っています。

相星 素子（あいほし もとこ）

東京都在住。小さな市民団体「Act for the Earth」の代表。演劇とワークショップをとおして、環境問題を若い世代に気づいてもらえたら。小学校と高校のPTA役員。ソウルに2年住んでいたため、韓流ブームにはまっている。



ESD を 知ろう



UNESCO ESD マスコット「DDくん」

ESD 基本用語集 vol.2

ESD を読み解くためのキーワード。
こんな言葉も実は ESD につなが
っているのです。

ヨハネスブルグ・サミット

2002 年に南アフリカ共和国のヨハネスブルグで開催された国連主催の「持続可能な開発に関する世界首脳会議 (WSSD)」の通称。世界各国の首脳や代表、NGO 関係者、経済・産業界などから数万人が参加した。日本の政府代表団に初めて NGO 関係者が加わったサミットでもある。1992 年の地球サミットで採択された、地球再生の行動計画「アジェンダ 21」の実施状況を検証し、新たな行動計画・数値目標を定めることが目指されたが、先進国と途上国の主張は平行線に終わったという厳しい評価も。このサミットで、日本の NGO が ESD の 10 年に関する提言活動を行い、日本政府から初めて世界に向けて ESD の 10 年が提案された。(上條直美)

伝統的な知恵

地域に代々受け継がれてきた伝統的な価値、知識、技術、人間関係など(総称して文化)は、地域の自然生態系を乱さない人と自然、人と人との関係を支えてきた。ところが、近代化の進展は、非科学的、非合理的の名の下でその伝統的な経験を否定するだけでなく、教育を通して科学的合理性、効率性、経済性を重視する文化が一層浸透した。先住民(その土地に最初に住み着いた住民の子孫)の有する価値、伝統的知恵、技術が、持続可能な開発を実施する上で不可欠と明文化したのはアジェンダ 21 第 26 章であるが、伝統的な知恵から何を学ぶかが改めて問われている。(小栗有子)

アジェンダ 21

1992 年地球サミット(環境と開発に関する世界首脳会議)の成果文書の一つ。本会議の最大の争点であった地球の生態系(環境)の維持と開発(とりわけ経済開発)の両立を図り、貧困の克服のために世界全体で協力すべき活動の青写真(行動計画)を示す文書。176 の国々が、セクション 1: 社会的・経済的側面、セクション 2: 開発資源の保護と管理、セクション 3: 主たるグループの役割強化、セクション 4: 実施手段に関わる各論について詳細に合意、40 章、本にして 400 頁以上に及ぶ。持続可能な開発への道筋を具体的に記すバイブルであり、持続可能な開発のための教育についてもその原則を第 36 章の中で示す。(小栗有子)

ESD 関連の本

『農村文化運動』172 号

(社) 農山漁村文化協会・発行

特集「国連・持続可能な開発のための教育 (ESD) の 10 年」—私はこう考える

日本の NPO と日本政府の共同提案が国連で決議され、「持続可能な開発のための教育 (ESD) の 10 年」が世界各国で取り組まれることになりました。本誌では、「ESD とは何か」「そこでどのような取組みをなすべきか」について、日本でこの運動を展開すべく結成された ESD-J(「持続可能な開発のための教育の 10 年」推進会議)の理事を中心とする主要な論者に、それぞれの「私の考え」をご執筆いただきました。(清水悟)

● A5 判 64 頁、400 円 (税込・送料別)、2004 年 4 月

● 購入方法: 題名、冊数、氏名、電話番号、送付先を明記の上、ファックスかメールで農山漁村文化協会へ

E-mail: shop@mail.ruralnet.or.jp Fax: :03-3589-1387 URL: http://www.ruralnet.or.jp/



開発教育キーワード 51 開発教育ブックレットシリーズ No.5

開発教育協会編集・発行

ここに掲載された 51 語のキーワードは、開発教育に関する用語だけでなく世界のさまざまな課題を読み解くための基本用語です。「地球的課題(16 語)」「開発理論・国際協力(13 語)」「地球課題を扱う教育(11 語)」「学校と地域の学習活動(11 語)」の 4 章で構成されています。「国際協力っていつから始まったの?」「国際理解教育と開発教育はどう違うの?」「グローバル化をうまく説明したいのだけれど……」などちょっとした疑問にすぐに答えてくれる便利な一冊です。(上條直美)

● B5 判 120 頁、1,575 円 (税込)、2002 年 3 月

● 購入方法: ファックスかメールで開発教育協会へ

E-mail: shop@dear.or.jp Fax: 03-3818-5940

URL: http://www.dear.or.jp

「日本実施計画」策定へ向けて、ご意見を

DESD 日本実施計画最前線

各省連絡会議が立ち上がった

今後 10 年間に世界各地で ESD をどのように広げ、深めていくかについての指針となる「国際実施計画」最終案が 10 月にユネスコより提示された。年内に各国からの意見を受け付け、2005 年 2 月確定の予定である。こうした動きのなか、国内でも 6 省（外務、環境、文科、経産、国交、農水）による各省連絡会議が立ち上がり、12 月上旬には第 3 回の集まりがもたれる予定である。現時点では、まだ初期的な協議段階にあり、参加メンバーも環境教育担当部局が中心だが、今後、厚労省や法務省、内閣府などの参加が望まれる。政府サイドの体制が整えば、NGO・NPO や経済団体、教育機関など主要なステークホルダーが一堂に会した円卓会議を立ち上げ、日本実施計画の策定に向けた国内体制を早く整えたものである。

ESD-J からの提言

ESD-J では、こうした体制や中身づくりに向けて、政策提言 PT を中心にメール上での意見収集や研究会での検討を進めてきた。体制づくりに関する提言は前号で述べたが、実施計画の内容に対する提言は現在以下のような項目を検討し始めたところである。

①国内の取組み：あらゆるレベルでの ESD というビジョンの共有、市民の意識向上と参加促進のための計画づくり、各教育分野に ESD を組み込むためのシナリオづくり、ESD コーディネーターの育成、教育者の教育・再訓練計画の再検討と見直し、学校教育や非公的教育カリキュラムの見直し、学校と地域をつなぐ仕組みづくり、地域主体の ESD 推進支援策、地域の ESD 拠点と支援センターの設置、地域レベルにおけるモデルプロジェクトの計画と実施、

啓発キャンペーンの実施など。

②国際的な取組み：アジアにおける ESD の実践交流の場づくり、アジアから世界の ESD 活動をつなぐ仕組みづくり、政府開発援助（ODA）における国際教育協力の見直しなど。

これらの内容は ESD-J 会員はもとより、より多くの NPO や市民・企業などの声（民意）が活かされたものを目指している。会員であるなしにかかわらず、みなさんのご意見ご提案をどしどし ESD-J へお送りいただきたい。

* DESD（ディーイーエスディー）とは、Decade of Education for Sustainable Development（持続可能な開発のための教育の 10 年 = ESD の 10 年）の略語です。

池田 満之（いけだ みつゆき）

ESD-J 副代表理事（政策提言プロジェクトリーダー、DESD ガイドライン策定検討委員会委員兼）、岡山ユネスコ協会理事、旭川流域ネットワーク世話人、(株)環境アセスメントセンター西日本事業部代表取締役など。

広めるか

～ユネスコ本部主催の国際ワークショップが開かれました～

及啓発活動に使われるメッセージに活用されることになりました。（国際会議の概要は、国際貢献トピア岡山構想を推進する会の HP <http://www.otc.jp/> 参照）

■国際ネットワーク・プロジェクトチーム（国際 PT）の活動

今回のワークショップでは、事前準備の段階から ESD-J、とくに国際 PT が積極的にかかわりました。国際 PT は、海外と連携して ESD を進めていくための窓口として、情報を受発信したり、海外の関係組織・団体などと一緒に、アジア太平洋地域を中心とした NGO ネットワークを形成しようとするものです。2003 年末に立ち上がった新しい PT ですが、ESD-J の活動を紹介しネットワークづくりを呼びかけるための多言語パンフレットを作成したり（英語と中国語版が HP よりダウンロード可）、ESD の 10 年のスタートとなる 2005 年 1 月のインド国際会議にも積極的にかかわるべく準備を進めています。岡山でのワークショップを皮切りに、日本各地の ESD 実践と世界で繰り広げられる ESD を強力につなげていきいきたいと思います。



大島 順子（おおしま じゅんこ）

ESD-J 国際ネットワークプロジェクトリーダー。2000 年より沖縄県国頭村において地域の自立を促し地域住民が主体となる村づくりの支援にあたり、地域資源を持続可能に利活用していくツーリズムの構築のための組織と人づくりに従事している。

ESD-J だより

ESD-Jは「国連持続可能な開発のための教育の10年」を追い風に、日本における持続可能な社会の実現に向けた教育を推進するため、2003年6月に設立されました。環境・開発・人権・平和・ジェンダーなど、社会的・教育的課題にかかわるNGO・NPOや個人の動きをつなぎ、大きな力としていくことを目的としたネットワーク団体です。「ESDの10年」がスタートする2005年はもうすぐそこ。ESDを語る場も徐々に広がっています。「ESDの10年」を、みなさまの活動にどのように活かすことができるのか？一緒に考えていきたいと思ひます。

2004年秋の活動報告

9月25-26日 理事会合宿を開催

今年度プロジェクトの方針確認や政策提言の方向性などについて話し合いました。

10月11日 地域ネットワーク・プロジェクトチーム (PT) 戦略会議を開催

ESD地域ミーティング開催者や中部地域のESD関係者が名古屋に集まり、地域の動きをつなぐための仕組みづくりについて話し合いました。コミュニケーション・ツールとして地域ネットワークPTのメーリングリストがスタートしています。

11月13-15日 日本環境教育フォーラム・清里ミーティングに協力参加

毎年環境教育関係者約200名が集まって開催される「清里ミーティング」。今年は全体会で開発教育・人権教育・教育協力分野の方々とともに、ESDをめぐってパネルディスカッションを実施しました。

11月～2月 ESD地域ミーティング続々共催!

11月20日の福井県を皮切りに12月～2月は地域ミーティングが目白押しです。埼玉(12/11)、長野(12/14)、千葉(12/18)、東京(2005/2/12)、三重(2/14)は開催日時が決定。旭川・岩手・石川・徳島・豊中・鹿児島でも順次開催を予定しています。詳細が決定次第、ESD-Jウェブサイトでお知らせします。

募集

2005年3月6日(日) 13:30-17:00

「持続可能な開発のための教育の10年」 キックオフ・ミーティング

いよいよ「ESDの10年」がスタートします。NGO・NPO、日本政府、国際機関、企業、教育関係者が一堂に会しESDへの取組みについて情報共有するイベントを計画中です。ぜひご参加下さい!

場 所 立教大学 (予定)

参加費 ESD-J会員 1,000円、一般 2,000円

主 催 「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議
連絡先 ESD-Jまで

2005年3月5日(土) 13:30-17:00

ESD地域コーディネーターミーティング

ESD地域ミーティング開催者と今後地域の動きをつくらせていきたい人が集まって、情報交換と相互支援の仕組みのあり方について検討します。

場 所 立教大学 (予定)

主 催 「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議
連絡先 ESD-Jまで

編集後記

もうすぐ3才になるわが子にも、自我が目覚め、いよいよワガママがエスカレートしてきた。訳あって現在親戚の家に居候中。昔の大家族のように子育てにはいい環境だと思いきや、チビスケの傍若無人な振る舞いに最近ではみんな呆れ顔だ。子どもは人びとの輪のなかで育つものという(3頁)。ESDで、隣の怖いおっちゃんも復活しないだろうか。(伊藤伸介)

開催しませんか?

ESDレポートを読む会

「ESDの仲間を増やしたいけれど、何から始めたらよいのか……」とお悩みのあなた。「ESDレポートを読む会」を開催しませんか?例えば学生のサークルで、PTAの集まりで、団体スタッフの勉強会で、などなど。数人から十数人で集まり、ESDについて語り合うときのツールとして活用してください。必要部数を無料でお送りいたします。



団体正会員

- (財)アジア・太平洋人権情報センター (ヒューライツ大阪)
- (財)アジア女性交流・研究フォーラム
- (財)オイスカ
- (財)キープ協会
- (財)京都ユースホステル協会
- (財)日本YMCA 同盟
- (財)ボーイスカウト日本連盟
- (財)日本自然保護協会
- (財)日本ユニセフ協会
- (財)日本野鳥の会
- (財)アジア協会アジア友の会
- (財)ガールスカウト日本連盟
- (財)日本環境教育フォーラム
- (財)農山漁村文化協会
- (財)日本ネイチャーゲーム協会
- NPO法人 ADP 委員会
- NPO法人 エコ・コミュニケーションセンター (ECOM)
- NPO法人 ガラ紡愛好会
- NPO法人 環境市民
- NPO法人 環境文化のための対話研究所
- NPO法人 キーパーソン21
- NPO法人 持続可能な社会をつくる元気ネット
- NPO法人 樹木・環境ネットワーク協会
- NPO法人 生態教育センター
- NPO法人 地球環境と大気汚染を考える全国市民会議 (CASA)
- NPO法人 地球こどもクラブ
- NPO法人 地球の未来
- NPO法人 やまぼうし自然学校
- NPO法人 ECOVIC
- NPO法人 開発教育協会
- NPO法人 くすの木自然館
- NPO法人 グリーンウッド自然体験教育センター
- NPO法人 グローバル・スクール・プロジェクト (GSP)
- NPO法人 国際自然大学校
- NPO法人 コミネット協会
- NPO法人 サイカチネイチャークラブ
- NPO法人 自然体験活動推進協議会
- NPO法人 当別エコロジカルコミュニティー
- NPO法人 ドングリの会
- NPO法人 ほっとねっと
- NPO法人 ボランティア・市民活動学習推進センターいたばし
- 「持続可能な社会と教育」研究会
- 「地球環境を守る会」リーフ
- Earth Guardian 倶楽部
- ECOPLUS
- OAK HILLS (オークヒルズ)
- NPO 政策研究所
- TVE ジャパン
- アースビジョン組織委員会
- エコテクノロジー研究会
- エコプラットフォーム東海
- えひめグローバルネットワーク
- オーシャンファミリー海洋自然体験センター
- くりこま高原自然学校
- サスティナブル・コミュニティ研究所
- 森林たくみ塾
- スリーヒルズ・アソシエイツ
- 世界女性会議岡山連絡会
- センス・オブ・ワンダー自然観察会
- 仙台いぐね研究会
- 日本アウトドアネットワーク
- 日本環境ジャーナリストの会
- 日本自然環境専門学校
- ハーゲ平和アピール平和教育地球キャンペーン
- 東アジア地域環境問題研究所
- ホールアース自然学校
- 岡山ユネスコ協会
- 環境・国際研究会
- 環境 NGO アジア環境連帯
- 地域活動協働協会 (LACA)
- 地球環境・女性連絡会 (GENKI)
- 地球市民教育総合研究所
- 帝塚山学院大学国際理解研究所
- とやま国際理解教育研究会
- (財)木文化研究所
- (財)バースセンス研究所
- (財)現代文化研究所
- (財)ポップ

「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議 (ESD-J)

URL <http://www.esd-j.org/>

e-mail: admin@esd-j.org

〒160-0022 東京都新宿区新宿 5-10-15 ツインズ新宿ビル 4F (社) 日本環境教育フォーラム内

TEL: 03-3350-8580 FAX: 03-3350-7818

● 会員募集中: 正会員 (10,000円)、準会員 (3,000円) 詳しくはHPをご覧ください ●



発行: 「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議

編集: ESD-J 情報共有プロジェクト・チーム レイアウト: 河村 久美

この冊子は地球環境基金の助成により制作されています



(11月末日現在 計79団体)